指導員養成講習会　理論Ⅱ　　2003.11.2

担当　加藤

指導の運営にあたって（スキー教程　技術と指導Ｐ６～Ｐ１４）

みなさん、こんにちは。SAK 専門委員の加藤です。宜しくお願いします。
思えば、10 年位前ですか、私もみなさんと同じようにそちらの席に座っていて、テストにでる部分を言ってくれないかなどと講義を聞いていたのを思い出します。その当時は、3 月の雪上行事での理論検定ではなく、１１月に先に理論検定があったものですから、この時期は理論の勉強で切羽詰っていました。その分、3 月の検定では、実技に集中できたのでよかったのかもしれません。
まず、最初のアドバイスとして、理論については、雪が降る前に完璧にしておくことをお勧めします。3 月の検定で実技に集中できるというだけでなく、理論をよく理解した上で、準指・正指を目指されたほうが、間違いなく効率的だし、うまくいくと思います。（そういう自分も正指を受けた時は、北海道のクラッセホテルで夜中の 3 時まであせって理論の勉強をしていたような気がします。次の日の朝理論があり、その後の実技一発目の急斜面小回りで失敗してしまいました）是非、雪が降っていないこの時期を有効活用して、合格できるよう頑張ってください。

それでは、本題にはいります。
私の担当は、教程のＰ６～Ｐ１４の「指導と運営にあたって」の部分です。赤ペン、蛍光ペン等あるかたは用意して下さい。今日お話したなかから、最低でも一問は出題されるものと思いますから、しっかり聞いてください。また、教程にそってお話していく中で、重要なところは言いますので、マーカーなりメモなりとるようにして下さい。

まずはじめに、６頁をあけて下さい。
スキースポーツの展開の図が載っていますが、重要な部分を読んでいきます。
上から１３行目に

> 指導者の方々が「スキーの専門家」というスタンスから、幅広いジャンルへの発展の道筋を考えていただくこと、そして具体的にアプローチする「行動の実践」に期待が寄せられる。

とありますが、幅広いジャンルへの発展というのが、この頁の表にあるように、「バックカントリー」「クルージング」「クロスカントリー」「自然体験教室」「テレマーク」「デモンストレーション」「アルペンレース」「カービング」「フリースタイル」「シチュエーション」であるかと思います。自分も指導員として、それぞれのスキーヤーがスキー技術を習得した後、そのニーズにあった道筋を提供できるようにならなければと思います。そのために

は、自ら積極的にレースにでたり、バックカントリーにでて、その究極の楽しさを体験していかなければいけないのではないかと感じています。

続いて１７行目から

日本のスキー界においても、インタースキー大会における潮流は、情報収集の時代から情報交換の時代へと推移し、今は情報を発信すべき時代になったといえるでしょう。それはまさに現代のインタースキームーブメントの方向性が、単なる技術発表や比較の場ではなくなり、国単位の垣根を越えて、実際に指導の現場に立つ指導者たちの「協働の場づくり」になろうとしているからです。

そして日本のデレゲーション（代表団）は、場、物、人の変化という観点から、求められる指導者像と指導活動のあり方についての提案を行い、その発表内容を基盤として教程の改訂を行いました。

本教程では、環境変化の観点の中に「情報化への対応」を加えて、「発信」できる指導者としての意識改革と実地の指導の形態や内容の研究を期しています。具体的には、指導者の役割として、単なる技術の伝達者ではなく、指導の本質である、楽しさ、面白さ、喜び、価値、といった究極の目的を意識して指導活動の全体を構成し、演出できる能力を求めています。

傍線部よく理解すること。詳しくは次の頁の「スキー指導を取り巻く環境」で説明します。

それでは８頁を開けて下さい。

１「スキー指導」を取り巻く環境

１．スキー指導は「生き物」

スキー指導は「生き物」とはどういうことか？

要約すると、「スキー指導」は、固定したものでなく、それを取り巻く環境のなかで生きる「生き物」だといっています。スキースポーツは、個人の健康や生きがい、心の豊かさが実感できるものではなくてはならないので、その要求に応えるためには、単一の目標、画一的な方法ではだめで、その場その場で変化していきます。また、スキーの楽しさが多様化し、そのため技術も進化するので、当然スキー指導も多様化し、絶えず進化する「生き物」となるわけです。

キーポイントになる言葉にアンダーラインを引いておきましょう。

私も指導する中で、年輩の方と若い方への指導は全く違うし、吹雪いている日とピーカンの日、１０年前と今の指導法では全く違うと言って良いでしょう。スキー指導というのは、その場その場で、また、時代によって絶えず変化していかなくてはいけないものなの

です。（もちろん基本的な技術は変わらないと思うのですが）

右の段の４行目に「そのことは、発刊されたこの新しいスキー教程がいつまでも改訂されないまま長く使われることが、けっして望ましいことではないということです」とありますが、たしかにもっともなことです。しかし、また近いうちにかわってしまうの？と「生き物」は分りますが、複雑な気もします。（皆さん高いお金を払って教程とＤＶＤをお買いになりましたもんね）

次に

２．環境の変化

前教程では、スキー指導を取り巻く環境の変化を次の三つと考えてきました。

① 場の変化（スキー場の整備・機能拡大）

（例）ゴンドラの設置、アクセス、圧雪技術の向上

② 物の変化（スキー用具の性能）

（例）カービングの板　ブーツの性能

③ 人の変化（欲求や価値観の変化）

（例）バッチテスト指向からの多様化等

今教程ではこれに「情報化」が加わります。

情報化社会の今、様々な「情報」が入ってくる。その中で、問題を解決するための「情報」を思考の材料とする「知識」として取り込む「情報の知識化」が必要である。

情報の知識化には

①知識の入力　　②知識の蓄積　　③知識の出力

がある。③の出力については、次の３、環境への情報・知識発信で説明します。

では９頁を見て下さい。

３．環境への情報・知識発信

読んでいきますのでアンダーラインを引いて下さい。

今回の教程は、「スキー指導」がそれを取り巻く環境の変化を受け入れ、受動的に対応するこれまでの考え方（情報収集）から、「スキー指導」がそれを取り巻く環境の変化に働きかけ、能動的に対応する新しい考え方（知識発信）の方向を提案しようとしています。

この「知識発信」というのが、前項の「知識の出力」となるわけですが、例えば、本文にあるように、今まではメーカーが開発する板によって、スキー指導が変わってきました。カービングの板が良い例です。しかしこれからは、スキー指導の進化が新しい板の開発を必然とするといった、積極的な知識発信が必要だということです。直接一般スキーヤーと接する指導者が、潜在ニーズを敏感に感じ取り、知識の発信をし、スキー界全体を盛り上

げていかなくてはいけないのです。

８～９頁でのキーポイントとは、９頁の下の図です。この図をしっかり理解して下さい。
また、語句も暗記事項でしょう。

次に１０頁を開けて下さい。

２　スキースポーツの指導（技術指導と学習指導）

１　スキースポーツの特性

まず、ノーベル平和賞をとったフリチョフ・ナンセンの言葉がでてきますが、読んでみましょう。

「あらゆるスポーツのなかで、その王者に値するスポーツがあるとすれば、それはスキー・・・・・・(略)」

スキースポーツの特性を最も分りやすく言った言葉かもしれません。

また、スキーには多様な楽しさがありますが、中核的な楽しさについて３つあげています。

① 克服欲求（滑降コースなどの自然条件に挑戦する面白さ）
　（例）初心者が転ばないで山麓まで下りようとするとき。兎平のコブ。横倉の壁。

② 達成要求（フォームなどの価値基準に挑戦する面白さ）
　（例）級別テスト。準指検定

③ 競争欲求（他人と勝敗を競う面白さ）
　（例）技術選手権。競技スキー。

そして、これらを取り巻く人間関係や仲間作りといったものも周辺的なスキーの楽しさとしてあげることができます。

これらの楽しさを味わうためには、スキー技術が必要になります。しかし、スキー技術は、あくまでスキーの楽しさ（目的）を味わうための手段であり、技術（手段）を目的と混同して指導することは、スキーの本質的な楽しさを体験できなくなる危険性をはらんでいます。

１０頁の下の図は是非頭の中に入れときましょう。

２　技術指導

要約すると、

指導の直接的な目標はスキー技術であると同時に、その究極的な目的は、スキーの本質的な楽しさの体験にあるといえます。技術指導の方法は、基本的に、この頁の図にあるように「導入」から「基礎」「応用」「発展」と順序性のある指導が一般的で、また合理性をもつでしょう。しかし、それは必ずしもスキーヤーの個性に対応したものではな

いということです。初心者が基礎を学ぶ場合、基礎が全体の中で何なのかを理解できないことがほとんどなので、初心者にとって、基礎はつまらないものになりうるのです。技術指導においては、その直接的目的の達成のみに眼がむけられるのではなく、絶えず究極的目的（スキーの楽しさ）が意識されなければなりません。そこで、スキーヤーの立場にたった主体的な学習活動への工夫が求められていると言えます。

小学生を指導するときなどは、前頁の克服欲求（「あそこまで転ばずに滑れるかな」）競争欲求（「あの木までだれが早くすべれるか競争しよう」緩斜面）などを考えることも大切です。また、大人の場合、周辺的なスキーの楽しさ（人間関係・仲間作り）も取り入れるなど工夫をし、スキーヤーが自ら学ぼうとする姿勢を育てることが大切です。このことは次の３、学習指導にも関係してきます。

では１２頁を開けて下さい。

３、学習指導

主体的学習を実現させるにはどうしたらよいのでしょうか？

右の段の２行目

技術がなくてもスキーの楽しさを味わえるという体験は、技術があればもっと大きな楽しみが味わえるという積極的期待を生み出します。そこから主体的学習が生まれのでしょう。

このことは、何も初心者だけでなく、上級者にもあてはまると思います。もっと上手ければもっと楽しいだろうと思わせる指導が必要なのである。そのためには、やはり、スキーの楽しさを第一に、指導することが大切であると思います。

１２頁と１３頁の図はよく見て理解しておいて下さい。

１４頁を開けて下さい。

３　スキー指導者の資質

１の技術力ですが、昔は画一的な指導をしていても、景気がよかったので、市場が飲み込んでくれた。今はスキー指導の品質が問われているということが書かれています。また、スキー指導者に求められているサービス生産の技術力は、つねに進化するスキー技術とその指導技術の力によって支えられている、と書いてあります。読んでおいて下さい。

２の製品力ですがアンダーラインを引いて下さい。

「断続的な変化」に直面している現在、「技術力はあるが、製品力に劣る」ということが、よく問題にされます。具体的には「技術指導」はできるが、「学習指導」はできないという問題です。スキー指導者がこの弱点をどう克服するかが、これからの重要な視点です。

製品力には、商品（サービス）の品質の良さだけでなく、消費者（スキーヤー）が何を求めているかを感じ取る力が必要であるといえます。製品力は商品の「パフォーマンス」だけでなく、消費者に「共感や驚きを与える」要素、つまり単なる機能を越えた個性が商品に与えられることを意味しています。

スキーヤーの指導に対する要求の時間軸が縮まっています。高品質に加えて、指導者の個性、主張を込めた指導（商品）がスキーヤーに新鮮な驚きや満足（顧客満足）を与えるためには、必然的に新商品開発のサイクルが短くならざるをえません。

スキー指導者が製品力を高めるのに必要なキーワードは、「フェイス・トー・フェイス」「インタラクティブ」「ネットワーク」であるといえます。「フェイス・トー・フェイス」はスキーヤーと指導者の１対１の関係で、「スキーヤーの個性」を尊重することが可能となります。「インタラクティブ」はスキーヤーと指導者の双方向のコミュニケーションで、単なる知識の共有から「知識の共鳴」を生み出すことが可能になります。「ネットワーク」はスキーヤーと指導者、スキーヤーとスキーヤーとのネットワークで交流のなかから新しい知識を創造することが可能となります。

技術力があるのは当然として、サービス（スキー指導）を顧客（スキーヤー）の要求に基づいて商品化できる製品力の向上が、スキー指導者に強く求められているといえます。

傍線部よく読んで理解して置いて下さい。

以上で駆け足でしたが、ＰＡＲＴ１「指導の運営にあたって」の講義を終わりにします。
最後に確認です。

① ９頁の図
② １０頁の図
③ アンダーラインを引いたところは、必ずでるというわけではありませんが、キーワードとなる語句は最低限覚えておいて下さい。

準指・正指受検を辛いと思っている人は是非意識をかえましょう。やっぱり、スキーは楽しくなくちゃ。だけど、今日の講義ではありませんが、ある意味、我々専門委員も準指・正指受検が楽しくなるよう指導を研究していかなくてはいけないのかも。私の場合、今までスキーをやっていて、一番楽しくて、一番技術が上達したのは、準指受検の年と正指受検の年だったような気がします。是非頑張って下さい。また、雪上でお目にかかることを楽しみにしています。